九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『一子相伝極秘巻』考

川平, 敏文
日本学術振興会特別研究員

https://doi.org/10.15017/10349

出版情報：文獻探究. 38, pp.94-103, 2000-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『一子相伝極秘巻』考

川平　敏文

はじめに

九州大学附属図書館には、宝永・正徳期から弘化・嘉永期にまでに刊行された、半紙本三冊から五冊ものの教訓・奇談本類二二七部、七五六冊を蒐集した「読本コレクション」がある。同図書館は、平成一一年三月まで本学で教鞭を執られていた中野三敏教授の監修のもと、同年七月から、インターネット上でその概要を公開しているが（http://www.lib.kyushu-u.ac.jp）、そこでは、このコレクションに収まる全ての作品が成立年代順に配列され、題簽・序跋・奥附など書誌的に重要な部分が画像データとして通覧できるほか、特に選ばれた八作品については、全部分の画像データとそれぞれの書誌解題が参照できるよう工夫されてもいる。

ところで、私はその八作品のうち、大進庵行願の『花間笑語』（宝暦三年刊）、半田山人の『一子相伝極秘巻』（明和七年刊）の二作品の書誌解題を担当したのであったが、全国各地に所蔵される諸本・伝本に関する情報などは、むしろその後の調査において追々充実してきた事柄の方が多い。よって本稿は、その改訂・更新版のつもりで作成したものである。但し、二作品のうち『花間笑語』については別稿を用意する予定であるので、ここでは先ず『一子相伝極秘巻』を取り上げる事とする。

†書誌

所　蔵　九州大学附属図書館読本コレクション。

書　型　半紙本五巻四冊（巻一・二は合綴）。

表　紙　原表紙。鳥の子色地に魚貝尽し。縦二二・八糎、横一六・〇糎。

題　簽　原題簽。浅黄色・双枠・左肩。「一子相伝極秘巻　一（三～五）」。巻二は後人により巻一と合綴されているため、表紙・題簽欠。

構　成　巻一　十八丁（序一丁、自序二丁、目録二丁、本文十三丁）。
巻二　十五丁（目録二丁、本文十三丁）。
巻三　十三丁（目録一丁、本文十二丁）。
巻四　十三丁（目録一丁、本文十二丁）。
巻五　十三丁（目録一丁、本文十二丁）。

序　文　1「極秘巻序」。末尾に「明和七年庚寅正月　合浦板部羅甫撰」。
2「極秘巻自序」。末尾に「明和七年寅正月／奥州半田山人驢庵書於東都蘊奥菴　印（半田／山人）印（驢庵／之印）」。

目録題　「一子相傳極秘巻第一（～第五）」。

内　題　「一子相傳極秘巻第一（～第五）　奥州半田山人著」。署名は巻一のみ。

尾　題　「極秘巻一（～四）」。巻五のみ「極秘巻下終」。

奥　書　「此一軸者……」。末尾に「明和七年寅正月」。

跋　文　なし。

刊　記　「江戸書林　大傳馬町二丁目　大和田安兵衛／須原屋伊八」。

匡　郭　四周単辺。縦一七・五糎（内矩）。

板　心　「極秘巻一（～五）　（丁数）」。

丁　付　巻一　一～三、一～十五。
巻二　一～十五。
巻三　一～十三。
巻四　一～十三。
巻五　一～十三。

句読点　なし。

挿　絵　巻一　見開二面（四ウ五オ、十一ウ十二オ）。
巻二　見開二面（五ウ六オ、十一ウ十二オ）。
巻三　見開二面（四ウ五オ、十ウ十一オ）。
巻四　見開二面（四ウ五オ、十ウ十一オ）。
巻五　見開二面（四ウ五オ、十ウ十一オ）。

画　者　北尾重政。

蔵書印　特になし。

備　考　改題・修訂本に『一心相伝極秘巻』『人間万事教訓書』『笑戯自知録』あり。「諸本」の項に詳述。

†著者

著者の半田山人については、その伝を詳かにしない。友人という板部羅甫なる人の序文に「吾友阿部驢庵（音六庵品）」とあり、また自序の末に「奥州半田山人驢庵書於東都蘊奥菴」とあるのに拠れば、姓は阿部、奥州の人で、江戸に蘊奥菴なる庵室を結んでいた事になるが、何処まで信用して良いのかは分からない。板部羅甫についても同じ。『国書総目録』に拠れば、半田山人には本書の外に幾つかの著作の名が見えるが、後述の如く何れも本書の改題本である。

†諸本　―三つの改題・修訂本

『一子相伝極秘巻』には、その改題・修訂本に『一心相伝極秘巻』『人間万事教訓書』『笑戯自知録』の三種が確認されるので、諸本は合計四種の系統に分類できるのであるが、読本コレクションにはそ

のうち三系統が揃っている事を以て珍とする。

筆者がこれまでに実見する事のできた諸本は、改題本を含めて以下の九点である。

1 「一子相伝極秘巻」 読本コレクション本 五巻四冊
2 「一心相伝極秘巻」 読本コレクション本 五巻一冊
3 同 国会図書館本 五巻二冊
4 「人間万事教訓書」 筑波大学附属図書館本 五巻二冊
5 「笑戯自知録」 読本コレクション本 二巻一冊存
6 同 東京大学総合図書館本 五巻二冊
7 同 都立中央図書館東京誌料本 五巻二冊
8 同 都立中央図書館加賀文庫本 五巻二冊
9 同 国会図書館本 五巻二冊

以下に諸本を概説してゆく。

先ず『割印帳』の記載は、明和六年十一月十八日不時の項に「明和七年寅正月／極秘巻　全五冊　作者／奥州半田山人著　板元売出し　大和田安兵衛」とあるので、1の読本コレクション本は初板と考えて良かろう。また『国書総目録』を閲するに、以下に紹介する改題本の名は見えても、この「一子相伝極秘巻」で立項されたものは見当たらない。その意味でも大変珍しいものといえよう。

改題本に『一心相伝極秘巻』がある。諸本中、2と3がそれである。板木は初板と同じ物を使用するが、題簽・目録題・内題が元の「一子相伝極秘巻」から、「子」文字のみが埋木にされて「一心相伝極秘巻」へと替えられたほか(本稿末図版1参照)、序文や本文にも八箇所ほど手が加えられている。左表がその本文修訂箇所一覧であるが、特に修訂のポイントとなったと思われる語句はゴチックで示してみた。なおこの表中では、見易さを考慮して、原文のルビは省略している。

	『一子』(初板本)	『一心』(修訂本)
a	有がたくも忝も、**神祖**天下をしろし召、(序、2丁オ)	有がたくも忝も、仁徳の御恵とて、
b	真言秘密、**浄土の五重、法華の密語**、禅の拈花、和歌の三鳥、(序、3丁オ)	真言秘密、禅の捻花、みな是心を種とする、和歌の三鳥、
c	御内意演説、秘事奥義、**奥方迄**があし引の、山吹色は御好物、黄いろな花の真盛り、皆太平の御仁徳、**奢りが過て**の秘事さがし、(序、3丁オ)	御内〳〵とは、秘事奥義、迚も角ても足引の、山吹色は嫌なき、黄いろな花の真盛り、皆太平の御仁徳、あまへ過ての秘事さがし、

d	e	f
当世を見よ、世上に鬼の有事一百三十六地獄の鬼よりも多し。仮令ば**国郡の君たる人**も、無慈悲にして民の飢・をすくわず、**賦税ばかりをきびしくし**、己は奢侈をきわめて楽しむは、**民を食ふ鬼**なり。夫より**下の吏**も、主の威をかり**賄賂を貪り**民を苦しむるは、（巻一、7丁ウ）	秘すべし〳〵。雷神より咎めらるゝ事有。（巻一、14丁オ）	**国家混乱せざれば、どふで忠臣はあらわれず**、扨は算盤の玉に目の玉をたして働らかせても**高が勘略奉行**、砂糖箱の進物も役替の甘味がついたばかり。海内に名はうられず。（巻三、2丁オ）
浮世を見よ、世上に鬼の有事一百三十六地獄の鬼よりも多し。たとへば家を治めるにも国をおさむるにも、人の苦労を帰り見ず、手前勝手の慾をはり、我ばかり花異をこのみ楽しむは、人を喰ふ鬼といふべし。夫を見ならひ、主の威をかり財宝を貪り人を苦しむるは、	（削除）	たとへ善をなすとも並や大体の善にては名はあがらず、別に替つた事の仕やうもなければ、中〳〵海内に名はうられず。是といふも太平のおかげ。

g	h
神祖の神徳により、海のはて、山のはざままで五倫の道行れ、（巻四、8丁オ）	此一軸者、一子相伝之。雖為秘巻、貴殿多年之因御執心、神文之上、不残令相伝畢。他人者努々御洩不可有者也。穴賢々々。 明和七年寅正月（奥書）
有がたき御代に生れ、海のはて山のはざままで五倫の道行れ、	（前文削除） 明和七年寅正月

これらの修訂箇所を一つずつ大まかに点検しておこう。

まずaでは、「神祖」なる、東照大権現徳川家康を具体的に指し示すと思われる言葉が避けられた。これはgの「神祖」が改められた事と同様の処置である。

bでは、「浄土の五重、法華の密語」という言葉が避けられた。この修訂の意味はよく分からないが、何か憚りがあったものであろう。

cでは、まず「奥方」という言葉が避けられ、太平の御代に「奢りが過ての秘事さがし」とあったのが、「あまへ過ての秘事さがし」と改められた。「奢り」という言葉の持つ批判的響きにひっかかったのであろう。

dでは、まず「当世」という言葉が「浮世」へと改められた。次

に「仮令ば国郡の君たる人も」云々という、地方領主階級を例にとってやや具体的に批判した部分が、「たとへば家を治めるにも国をおさむるにも」云々という一般的な斉家・治国論へと和らげられた。

eでは、「秘すべし〳〵」云々という言葉が削除された。これはhにおいて、「神文之上、不残令相伝畢」「努々御洩不可有者也」等という、いかにも秘伝書の奥書めかした文章が削除された事と同様の処置である。

fは、天下に名を轟かせようと思っても、「国家混乱せざれば、どふで忠臣はあらわれず」云々とあったものが、「たとへ善をなすとも、並や大体の善にては名はあがらず」と、やや過激な表現が和らげられ、さらに「是といふも太平のおかげ」と、太平賛歌の言葉が付け加えられた（本稿末図版2参照）。以上が修訂の概要である。

ところで、改題本というのは多くの場合、初板本の本屋とは別の本屋が、その板木を購求して再発行する場合に生まれるものであろうが、改題本の刊記を見ると、そこには初板と同じ大和田安兵衛と須原屋伊八の名が記されている。そのうえ巻末には、「東都書林瑞玉堂蔵板目録　大傳馬町二丁目／大和田安兵衛」の蔵板目録一丁が附されてもいるので、この改題本は、開板に携わった大和田らが自ら改題し再刊したものと考えられる。ならば何故わざわざ改題する必要があったのかという事になるが、上述の如く、士分階級を揶揄したものと聞こえぬ事もない部分が訂正されている事、また巻末の如何にも秘伝書の奥書めかした文章が削られている事などを併せ考えるに、秘事モノの流行に乗じてやや悪ふざけが過ぎた事を反省しての、自主的な改題・修訂であったのだろう。それにしても、「一子相伝」と「一心相伝」との間に如何ほどの差があるのか、今一つ分からないが、もしこの改題本が天明末・寛政頃に出されたものであったとするならば、いわゆる寛政の改革前後の学問文芸における綱紀粛正・道徳奨励といった動き、或いはその実質的な効果の一つとも言える心学の大流行などの現象に敏感に対応したものかもしれない。

次に、この改題本を更に改題修訂したものとして、『人間万事教訓書』がある。4の筑波大学本がそれである（本稿末図版1参照）。『国書総目録』に拠れば、これは筑波大学本一点しか確認されない。この本は、先ず題簽を「人間万事教訓書　絵入　上（下）」と改めて五巻を上下二冊に仕立て直し、見返し・序文・目録を一新し、かつ本文に若干の手を入れたもの。以下に改変箇所を順に見てゆく。

先ず見返し。そこには表題のほか、「原勤堂開雕」の文字、また左記のごとき広告文が見える。

> 此書は古今未曾有のをかしき教訓の書にして、先生友人に草稿を見せしに、大に一笑して腮をはづせしと云故に、本文を封じてあらはさず。先読んと思はゞ、頬を硬ふして而后開くべしといふ。

次に序。ここではそれまで付されていた板部羅甫と半田山人の序が取り去られ、「人間万事教訓書序」と題する、次のような序一丁が取り付けられた。

> 教訓とは何ぞや。教とは人を教ゆる所以の法也なぞと、朱子学をしへに異にして、老荘・浮屠家の方便に蜂蜜をくはへ、児婦の

読に倦ざらんことを第一に製し上たる作なれば、一たび閲する徒は禅祖の如き九歳面壁の行、不修行して早悟す。孔方一文なき貧者も、忽大福長者と成。彼放下師の門にも不入して奇術を著すこと、此書によらずして何ぞ乎。

維時文化十四丁丑仲秋

奥羽陳人述　印（陳人／之印）

これによって、この改修が文化十四年に行なわれたものである事が確認される。

続いて目録。それまでは各巻巻頭に一丁程度の目録が付されていたが、この筑波大学本にはそれが無く、惣目録という形で三丁に纏めて記されている（目録題「人間万事教訓書」）。ところが後述するように、本書を更に改題した『笑戯自知録』では、この各巻目録が謂わば復活しており、そこには「人間万事教訓書」の目録題が見えるから、当初は従来どおり各巻目録を付した形で再刊しようとした跡が窺える。では何故にこの各巻目録を省いて新たに惣目録を作り直したのか。その手掛かりは、作り直された目録の中身にあろう。例えば第一巻所載のもので言えば、「堂塔・伽藍を手を着ずして車のごとく廻す妙術」は、新しい目録では「家蔵を手を付ずして車のごとく廻す教」になり、また「金銀何程も望の通財主になる極秘伝」は、「金銀を望のごとくためるをしへ」になるといった具合に、文章がやや分かり易くなり、また「妙術」「秘伝」といった文末の語が全て「教（をしへ）」という言葉に改められている。これは『一心』において秘伝書めかした言葉が削られた事と相通ずる態度であって、本書が「教訓書」であるという事を特に強調したかった為であろう。

そして本文。ここでは、各巻の内題が「人間万事教訓書」に、同じく尾題が「教訓書」に彫り改められた以外は、柱題も丁附もそのままに残されていて、目立った修訂は行なわれていない。唯一確認する事ができたのは、それまで巻五の最後に置かれていた「天下第一肝心肝要の大道を神文なしに伝授の法」なる秘伝、約一丁分がすっかり削られて、「教訓書大尾」という尾題が埋木されている事である。この条の内容は、神儒仏の教えの本源は全て「孝」にあるのだから、たとえ田夫・野人であっても、孝行なる人は博学多才の人にもまして貴いという事を知るべし、というもので、特に憚りがあるような語句も見当たらないと思うのであるが、何故か削除されている。理由は分からない。

最後に奥附。「東都　川村伊助製」の虫歯薬「歯痛散」の広告がその大半を占めているが、左端に、「売弘所　江戸横山町二丁目／文化十四丁丑仲秋発販　川村儀右衛門板」とある。川村儀右衛門は化政期に活動した本屋で（矢島玄亮『徳川時代出版者出版物集覧』）、見返しにいう「原勤堂」も恐らくこの川村であろう。

『人間万事教訓書』に関しては以上である。因みにこの筑波大学蔵本は、印記に拠れば、尾張の貸本屋大野屋惣八の蔵本、所謂「大惣本」である。それに関連して興味深いのは、下冊見返しに「半田陳人／一夕語　全七冊」「愚佛山人／太平楽」と墨書されている事で、もしかしたら半田陳人には「一夕語」なる別の七冊本の著作があったのかも知れない。

さて、次にこの『人間万事教訓書』を更に改題刊行したものが『笑戯自知録』で、諸本中5から9まで全てこれである（本稿末図版1参照）。題簽を「教外別伝笑戯自知録　上（下）」とし、見返しを刷新したほか、序文を新たに加え、内題などを彫り替えて体裁を整えたもの。筆者が調査した諸本の中では、この『笑戯自知録』が最も多く見かけられたが、度重なる改題のせいもあって、以下に示す如くこの本の造りはかなり粗雑である。

先ず見返し。これは「諸葛孔明秘伝／教外別伝笑戯自知録／」と改められた。この見返しに書肆名を刻するものとそうでないものがあるが、それについては奥附の所で述べる。

次に序。ここでは先の奥羽陳人の序に加えて、新たに竹窓軒虎丸なる人物の序文一丁が付せられた（但し、5の読本コレクションには奥羽陳人序が欠落）。

笑戯自知録

諸葛亮嚮に極秘の一巻を著す。則一天下の万民に教ゆる所の秘伝にして、黄石公が張子房に与ふる所の三略よりも猶尊し。此秘書何の時にか本朝に渡りて、奥州半田陳人故有て秘蔵す。是安部清明が金烏玉兎集を石の筥に納て秘蔵するに等し。然るに陳人世を辞する志発すること有て潜に彼書の朽ぬるを惜むまゝに、書肆某に与て万民に示さんことを想ふ。因て書肆何某、かの書を閲るに、能自知録の意にかなへりとて、教外別伝と題して、普世に行はんと欲すと而云。

竹窓軒虎丸誌

『自知録』は、中国明末の禅僧雲棲袾宏の作成した功過格の一種である。功過格とは、一日の自分の行動を善行（功）と悪行（過）とに分け、それらをその程度に従って点数化し、以て自省するための書で、『自知録』の場合は和刻本として万治三年、元禄十四年の各板があるが、特に安永五年の仮名本『和字功過自知録』の刊行以後、一頻り流行したものの如くで、その影響は寛政七年刊、唐来参和作の『善悪邪正大勘定』他、黄表紙の善悪モノにも見受けられるという。「笑戯自知録」の書名は、明らかにこの流行をかすめたものであろう。

続いて目録。先ず惣目録の題は「教外別伝笑戯自知録」と改められた。しかし上述したように、ここでは先に敢えて外されたはずの「人間万事教訓書」と題された各巻目録が「復活」しているから、各巻巻頭に以前の書名が残るという不体裁を生じてしまっている。これはやや杜撰な編集と言わねばなるまい。

次に本文。各巻内題が「教外別伝笑戯自知録」に修訂された他は、新たな手が加えられた様子を窺えない。特に各巻尾題が『人間万事教訓書』時代の「教訓」あるいは「教訓書」のままであるのは、これも編集の杜撰さの表れと見る事ができよう。

最後に、見返しと奥附から窺える、書肆に関する情報について。これらは諸本間に微妙な相違があって複雑になるが、先ず見返しについて言えば、5の読本コレクション本は「諸葛孔明秘伝／教外別伝笑戯自知録／玉巌堂発兌」とするが、6の東大本は「玉巌堂発兌」の部分が削られて空白、7の東京誌料本はその空白に「玉巌書舗／江

戸横山街第／三坊和泉屋金／右衛門和漢書／籍精造発兌記」の朱印が捺してある。8の加賀文庫本も7に同じ。9の国会本はそこに別の「玉岩／書堂／之印」という朱印が捺してある。同様に奥附は、5の読本コレクション本は巻二までの端本のため確認不能、6・7の東大本・東京誌料本は江戸の和泉屋金右衛門ほか三都十肆、8の加賀文庫本は奥附なし、9の国会本も奥附なし。これを簡単な表に纏めると次の通りである。

諸本	見返し	奥附
5	玉巌堂發兌	確認不能
6	なし	和泉屋ほか十肆
7	朱印〔玉巌書舗…〕	和泉屋ほか十肆
8	朱印〔玉巌書舗…〕	なし
9	朱印〔玉岩堂書…〕	なし

6・7・8の先後がはっきりしないが、見返しと奥附の形態、あるいは刷りの状態などを勘案して、5を早期、9を晩期、その間の6・7・8を中期と概ね推測しておく。

以上、諸本について見てきた。明和七年の刊行以後、文化十四年以後まで三回に亙って改題・修訂されて読み継がれたのであるから、本書はなかなかのロングセラーだったという事になる。そして本書が寛政の改革あたりを挟んで、それまでの秘伝書のパロディーという装いから、教訓書としての装いに移行しているという事実は、戯作史の流れを考える上で面白い事例と言えるであろう。

†内容 ―滑稽秘伝集

半田山人の自序にかく云う。近年、諸子百家の秘書口決が板行にされて、手短な金儲けの種となっている。神道者は「神秘」と名付けて小金を取ろうとするので、為にかえって神道衰微の基となり、医者の「秘方」というも金目当てであるから、その仁術たるの主意を失っている。そのほか真言の「秘密」、浄土の「五重」、法華の「密語」、禅の「拈花」、和歌の「三鳥」「白うるり」「放免の付け物」等々、皆何かと文字言句に理屈を付け、無性に金を巻き上げんとする魂胆。しかし衆人みなそれと気付かぬまま、まんまと騙されている様子である。これも太平の世のお陰、奢りが過ぎての秘事探しと言えば言えるが、そのような秘事好きの人の為に、私が睫毛の秘事とでも言うべきような、いつも側にありながらそれと気付かない秘事ばかりを取り集め、礼金無しに伝授するのであると。『万宝全書』や「秘事口伝」等と銘打った諸芸全般に亙る秘事モノの流行が、この書成立の背景としてあった事が確認される。

さて目録を見るに、そこには「堂塔・伽藍を手を着ずして車のごとく廻す妙術」、「金銀何程も望の通財主になる極秘伝」から始まって、「寒中の烏を多く手捕にする妙術」、「一生水難にあわぬ秘伝」（以上巻一）等々、如何にも読者の関心をそそるような秘伝が、全部で四十九項目立てられている。その内容はと言えば、例えば冒頭の「堂塔・伽藍を……」という秘伝は、伊丹諸白へ南蛮酒を等分に加えて丁度良い位に温め、首を濡らす程に随分と飲んで、暫くして

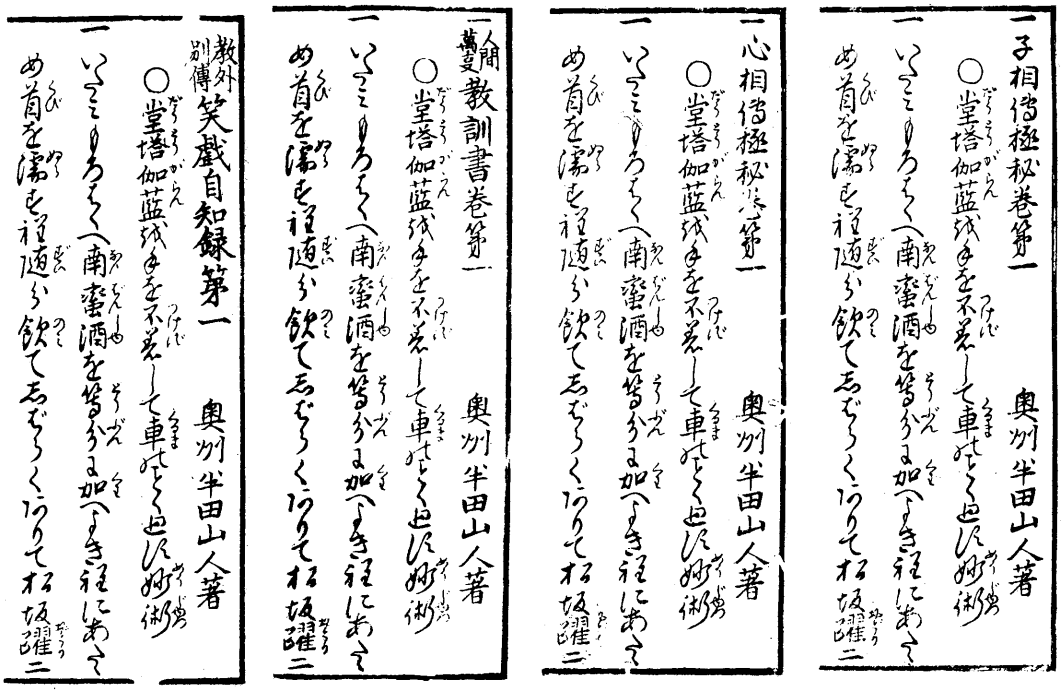
松坂踊りを三番躍って、その後座ってみよ。堂も伽藍も山も川も目に見える物すべてが廻る筈だ、というもの。「一生落馬せざる法」（巻五）は、「落馬を恐るゝものは馬にのらずして駕籠にのるべし。落馬をせざる事妙なり」。

ここに記されている秘伝というのは、殆どがかかるナンセンスで滑稽なものばかりであるが、その一方で、日常生活における心の持ち方についての比較的真面目な心法伝授が織り交ぜてある所、教訓本としての要素はきちんと兼ね備えている事はやはり見落とせぬであろう。「求めずして大安楽を得る秘決」（巻四）に云、今日のような太平の世であれば、貧者とはいっても往古の乱世に較べれば長者のようなものである。最近の腐儒達が、世が衰えたとて生涯不足を懐いて死ぬのは誠に憐れむべきで、当世こそ五倫の道は山海の果てまで普く行われているのであって、「只、古しへの乱世にたくらべ今の世に生まれたるを大成幸として、天恩国恩の有がたき事をわきまへ、驕奢をこらへて心を安じ、業を楽んで日をおくる、是を大安楽の秘伝とはいふ」と。また「堪忍の玉を掘出す奇法妙伝」（巻五）に云、「一切万事、兎角堪忍すれば十に九ツは皆治るなり。（中略）其腹のたつとき、先づ体をすへて能座し、我が頂の上に如意宝珠といへる玉をいたゞきたる思ひをなし、他念なく此玉の落ざるよふに守るべし。其怒りの止む事甚妙也」。とはいえこの書の場合、その全体に占める滑稽の度合いはかなり高いものとすべきで、その意味ではやはり、内容的には後の滑稽本と称されるものによく通じていると言えよう。

最後に、当時の風俗を伝える幾つかの記事を抜き書いておく事にする。「唐より渡りたる千年以上の宝を容易手に入る秘伝」（巻一）に、「近年、古文辞の学世に行れて、書は西漢以上と張肱になるはもつとも尤なれど、今の書生野郎頭で唐人風をもちこみ、猪鶏を無理喰に賞翫し、鼻がつかへてめいわくながら、こつふ盃を握り無性にのむを古学者の株と思ひしより、滅多に唐物を好み和物を賤しむ。（中略）依て好事の少年の為についへを省むと爰に秘伝を記す」として、その秘伝に云、唐の高祖鋳造の開元通宝をただの一銭でよいから手に入れよ、貴重な古銭である、これに優る宝はないと。徂徠末流の度の過ぎた中華趣味を揶揄しているのである。

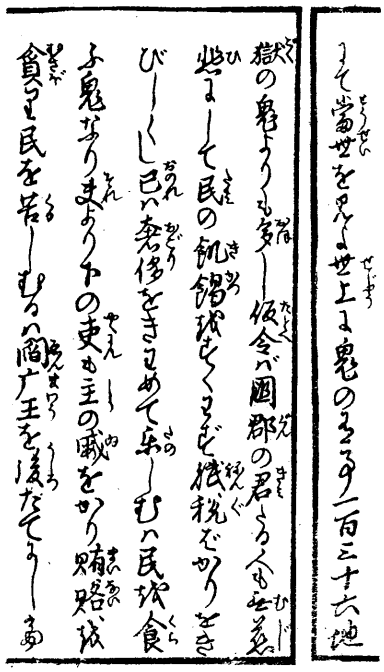
他に「匹夫も天下に名を揚る妙決」（巻三）では、今時の如き太平の世には、武勲によって名を天下に揚げることは先ず無理であるから、「当世に名を揚んと思はゞ、上手なる役者になるがよし。長崎より津軽のはてまで、江戸の海老蔵が名をしらぬものはなし。殊に衣類の模様より髪の結つき詞のつかいよふまで、江戸中の鏡となりて皆其風をまなび、男女顔色を変じて役者の贔屓を争ふありさま、誠に移風易俗、聖人の楽にまさり、名を海内にひろむるもことわりなり。されば伊藤・荻生の学才も、活た内には人しらず、今しられてもちんぷんかんの仲間ばかり」。日本が誇る名儒、仁斎・徂徠両先生の高い才知学徳を以てしても、その風体のみで天下諸人を靡かす歌舞伎役者、市川海老蔵の「移風易俗」には叶わぬものだと。明治期には役者も教導職に加えられたというが、それを思えば、これは強ち突飛な発想でもなかったという事になる。

図版1　諸本の内題（部分）



1．一子相伝極秘巻　2．一心相伝極秘巻　3．人間万事教訓書　4．笑戯自知録

図版2　巻一、7丁ウラの修訂（部分）



修訂前（『一子』）　修訂後（『一心』）

付記　本稿は文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

（かわひら　としふみ・日本学術振興会特別研究員）